大和物語

作者

作者は未詳。古来、在原滋春、花山院、敦慶親王ゆかりの女房大和あるいは伊勢などの諸説があるが、古く「袋草紙」に「作者不審」とあるとおり、作者を特定する根拠は見当たらない。近年の研究では、作中の主要な人物の関係や素材と語り手のつながりなどから、作者というより、作品の世界を作り上げた歌語りの場を解明し、そこから作者像を導き出そうとしている。宇多法皇とそれにつながる人々の社交圏に属する人々の歌語りが多く、同代の勅撰集「後撰和歌集」に対して、私的な世界への傾斜が強いことから、その歌語り圏の女流たち、例えば、兵衛の命婦とその娘の大和、伊勢とその娘の中務（なかつかさ）などをあげて、作者像を確定しようとする考究がなされている。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」（片桐洋一他校注、平成六〔一九九四〕年、小学館）によった。新編全集の底本は、為家本（前田家本）を用いているが、これは、江戸時代以降流布本となった二条家本の系統に属する善本である。

「大和物語」は異本が多いが、二条家本系統のものが一般に読まれ、現行の活字本も、ほとんどがこの系統のものである。為家本は、大系本のほか、柿本奨「大和物語の注釈と研究」の底本となり、定家自筆本系統の伝為氏本が「日本古典全書」の、天福本が「日本古典文学全集」の底本となっている。二条家本以外の諸本（六条家本系統と呼ばれることもある）には、御巫（みかなぎ）本・鈴鹿本があり、本文の異同や相当量の附載説話で注目される。他に、勝命本と言われる、正治二（一二〇〇）年の奥書を持つ本の転写本の系統の本があり、諸本との関係が重要視されている。

▼書名

「大和物語」という呼称は、平安時代末期の歌学書（前記の「袋草子」など）で見られるようになるが、別名はない。その由来については、作者または作者と仮託された人（女房大和）の名前によるとする説、大和は地名で、「伊勢物語」に対して付けられたとする説、唐の物語に対して日本の物語、あるいは大和歌に関する物語とする説などがあるが、いずれも定説と言える段階にはない。

▼成立

成立時期を限定できる外部資料はない。作中人物の呼称などで、八十一段に、天暦八（九五四）年崩御の穏子皇后を「故后の宮」としていることを除くと、他は全て天暦五（九五一）年までであるこ

とから、成立時期の上限をその年とするのは、諸説ほぼ一致している。八十一段の「故」文字などを後人の補筆とみるかどうか、また、成立後の説話の付加や本文・章段の改訂などをどのように推定するかで分かれるが、天暦五年を大きく下らない時期には、かなりまとまった形で成立していたと考えられており、複数の手による何回かの増補改訂を経て、一条天皇期に、現行の流布本の形になったとするのが、成立時期についての大枠となっている。

▼内容

歌にまつわる小さな物語や説話を集めた歌物語集で、現行の流布本は百七十三の章段から成る。「伊勢物語」が、百二十五の章段を在原業平と想定させるある男の一代記となるように構成してあるのや、「平中物語」が平中の歌語りを集めたものになっているのに対して、「大和物語」は特定の人物に限らず、実在の人物に限っても百人を越える人々の話を集めている。物語の配列も、部分的に同じ人物に関するものを続けたり、主題・主情の連想で続けたりする部分はあるものの、全体として構成と言えるようなものはない。

百七十三の章段を、普通、百四十段までを第一部、百四十一段以降を第二部として、二部に大別している。第一部は、語り手にとって近い過去、あるいは同時代の人物たちの歌にまつわる話を事実として物語ったものから成る。この実在の人物は、天皇、皇族、公卿・殿上人、僧侶、女房など、百余人に及ぶが、それらの人物は、宇多天皇とその周辺につながる人々を主としている。敦慶親王、藤原定方、藤原兼輔、源宗于（むねゆき）、源公忠、平兼盛、元良親王らと、それらとゆかりのある、俊子、監の命婦、大和、伊勢らの女房・歌人たちがそれである。これらの人々は、多く「後撰和歌集」の作者であるが、「後撰和歌集」がより権勢の立場にあった人の作が多いことと対照的に、内容においても、風流韻事に傾いており、それも、恋の悲哀、旅や死の別れの悲しみ、人生の不如意というような哀感を基調としている。

それに対して、第二部は昔物語と言うべき、伝説や伝説的な人物の逸話が集められている。すなわち、生田川、蘆刈、猿沢の池の采女、浅香山、処女塚、姨捨、良少将の出家の話などがそれで、ここでは、地方に伝わる、哀しくも優しい人の心を歌い上げる話が多い。

▼表現

「大和物語」は、「伊勢物語」が簡潔優雅な文体によって醇乎（じゅんこ）たる叙情的香気に満ちているのに対し、散文的、叙事的で、現実に起こった歌語りを叙述するという傾向が強い。その点、説明的でややくどい文体だと評されたりもするが、現実の多様で雑駁なありように対応する説話的な写実性であるともいえるわけで、物語文学の可能性を内包して、次代につないだ作品と評価できるのである。

参考文献

❊ 教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語　大和物語」阿部俊子・今井源衛　岩波書店　昭三十二

日本古典全書「大和物語」南波浩　朝日新聞社　昭三十六

日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」高橋正治　小学館　昭四十七

「大和物語諸注集成」雨海博洋　桜楓社　昭五十八

新典社校注叢書5「校注大和物語」柳田忠則編　新典社　昭六十三

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」高橋正治　小学館　平六

▽研究書

「大和物語」（塙選書）高橋正治　塙書房　昭三十七

「大和物語総索引」塚原鉄雄他　笠間書院　昭四十五

「歌語りと歌物語」雨海博洋　桜楓社　昭五十一

「大和物語の注釈と研究」柿本奨　武蔵野書院　昭五十六

「大和物語の世界」尾崎左永子　書肆フローラ　平十一

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「伊勢物語　大和物語」片桐洋一　角川書店　昭五十

研究資料日本古典文学「物語文学」久保田淳他編　明治書院　昭五十八

「大和物語研究の現段階」迫徹明　国語と国文学　昭五十四・二

「大和物語」上　下（講談社学術文庫）雨海博洋他　講談社　平十八

❊ 生徒用

新明解古典シリーズ3「伊勢物語　大和物語」桑原博史監修　三省堂　平二

新潮古典文学アルバム3「竹取物語・大和物語・宇津保物語」藤井貞和・大岡信　新潮社　平三

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他　小学館　平六

「大和物語」上　下（講談社学術文庫）雨海博洋他　講談社　平十八

「心にグッとくる日本の古典2」黒澤弘光・竹内薫　NTT出版　平二十四